

## 酪農で伸びるひるぜんを訪れて

最近の食生活は、20年ごろを境として、次第に向上している。生活の欧風化といわれ牛乳の消費量も年を追うごとに増加してきている。

しかし、この増加率も35年までは毎年20パーセント以上の伸びを見せていたが36年は13パーセント、昨年は11パーセント強の伸びしか見られず、一部には、食生活の欧風化も、従来の食習慣から脱却できず、飲用乳はジュースと並んだ純粹の飲料としてパンから独立して使用され、チーズもビールのつまみなどとして、パンから切り離されている、といわれている。

こう云われて見ると乳製品の需要は飽和点に達しているのではないかとも思われてくる。

だが、動物性蛋白質の摂取量を外国と比較すると米国の1人1日66グラムに対し、日本は、18グラムしか取っておらず、また牛乳については、1年1人当たり18キログラムであり、これに比べフランスはその10倍、西独は11倍、米国、ニュージーランドでは15倍となっている。

このような現状から見て、まだまだ伸びる可能性はあるわけだ。

ここ最近の牛乳生産量を見ると本県は35年4万3千トン、36年は5万5千トンで増加率30パーセント、37年は6万6千トンで増加率20パーセントとなっている。

また、1日平均の生産量を見ると35年116.5トン、36年152トン、37年181.7トンと増加傾向にある。

乳用牛飼養頭数を見ると、飼養農家数はあまり増加していないが、飼養頭数は、35年の1万8千頭が、37年には2万7千頭と増加し、飼養規模も、1戸当りの平均は35年1.7頭が、37年は2.5頭と増加し、多頭化の方向に運んでいる。

しかし農業の成長部門といわれる酪農も、さらに飛躍的に多頭化し、これに伴ない省力化を行ない、併せて自給飼料を確保することによって生産費のコストを下げ、経営の合理化をしなければ、将来貿易自由化の波に対処できなくなることも考えられる一。

そこで、記者は岡山県最北部に位置し、ひるぜん山麓の拡大な土地にジャージー牛を放ち、草地酪農を行なっている真庭郡川上村を訪れて見た。つぎにその見聞のあらましをお知らせしよう。

### ジャージー牛の飼育

姫新線中国勝山駅で下車し、ひるぜんに向ってバスで2時間、中福田で下車。

この付近は、中国山脈火山帯にあつて供積期末に噴出した十座ばかりのトロイデ火山群からなっている。従つて土地は火山灰で真つ黒な表面を見せている。また、土壌は火山灰土特有の酸性土壌である。

ここは夏は涼しく、関西の軽井沢ともいわれ、非常に過しよい土地であるが、冬は長く1月、2月の平均気温は零下5度という寒さで、これに加え降雪も1メートルを越える状況である。旧陸軍は山麓一帯5千ヘクタールを演習場として使用していたが、終戦とともにその事情は一変することとなった。

従来ひるぜん一帯は和牛と水田による農業が営まれていたが、昭和29年に美作集約酪農地域に指定され、ニュージーランド産のジャージー牛が導入された。この牛は放牧性が強いといわれている。最もで、ニュージーランドは面積は日本の約3分の2くらいだが、国土の30パーセントが集約的な牧草地となっており、20パーセントの草地とともに50パーセントの土地が養畜に向けられており、牧草地の管理と放牧の技術は世界一等国なのである。

ひるぜんの山麓は、広大であり、牧草も十分植栽できる基盤を有し自由に放牧できる可能性を持っているということができよう。

29年にジャージー牛が導入されて、ひるぜんの事情は再度変わった。

寒冷地と湿田地帯のためほとんど作付けしていなかった裏作に牧草が覆われ始め、山麓のゆるやかなカーブとスロープには雑草から牧草を生産する基盤が芽生えた。

爾米10年、ひるぜん一帯には730戸がジャージー

## 岡山畜産便り 1963.07

牛を飼養し、現在では 2,620 頭となっており、1 戸平均 3.6 頭の飼養規模である。

### 第 1 回卒業生を送る県立酪農大学校

昭和 36 年には、ひるぜんの広大な土地をより効果的に利用し、若い青年に酪農経営の実際について必要な知識を身につけてもらおうと岡山県立酪農大学校が開校した。

火山灰土の真っ黒な黒ボコ道を辿ると一面緑に覆われた原野の中に赤屋根の校舎が見えてくる。

同校には今年 4 月に入校した 1 年生 34 名がジャージー種の乳牛 26 頭とともに生活している。

ここにこの大学の特殊性がある。開校は一昨年であるから 2 年生も、また 3 年生もいるわけであるが、今は学校にはいない。これらの学生は自宅で学校での勉強を自分の家の経営に取り入れようとして懸命な努力をしている。

したがって、4 月に 1 年に入学するとその年の 7 月まで全員が寮に入り学校で勉強する。翌年は 2 年生として 8 月に学校生活に入り 11 月まで勉強する。再び自宅での実習期間に移り、翌年の 12 月に第 3 学年として学校での勉強を行ない、翌年 3 月には酪農大学校を卒業して実社会に入ってゆくわけである。

教室から 1 歩出て見るとジャージー牛がラジノクローバー、イタリアンライグラス、オーチャードライグラス等々の牧草を思い思い食べていた。

最近、完成を見た施設にルーズ・バーン牛舎（開放牛舎）とスタンション式牛舎がある。

ルーズ・バーン牛舎は面積 264.5 平方メートルで、牛舎の中央部前側には 2 階から干草が落ち、搾乳するときは、牛舎の後側に待機させておいて、2 頭ずつ搾乳室に入れ、搾乳された牛乳は直接集乳缶に送り込まれる。

スタンション式牛舎は 115.7 平方メートルのもので、自動給水装置も取り付けられている。

またスタンション式牛舎の隣には収容量 1 万貫のサイレージが入るサイロが完成しており、これにより約 10 頭分の飼料が確保されるわけで、酪農の飼養から搾乳までのモデルケースが 1 カ所に完備されたわけである。

学校での生活は、朝 6 時 30 分から乳牛の飼料給与、

搾乳等の実習を 7 時 30 分まで行ない、朝食を取る。

8 時 30 分から教室で酪農の技術について講義を受け、午後からは、机の上で習った技術を実習に移すわけだ。

酪農大学校は何といっても実際の技術を見につけることであり、そのため実習時間、また家庭での研究時間を多く取っている。

3 年を経て、卒業の暁きには酪農経営士として出発するのであり、その第 1 号が来年 3 月には誕生する。実社会と結びついた酪農経営士、それには改善しなければならないことも、また新しい技術を取り入れて酪農の多頭化、企業化等経営の合理化を推進させなければならないという義務が待ち受けている。そこには困難な壁が生じるかもしれない、しかしそれだけに大きな期待と希望がもたれるのである。

### 原野などの高度利用で牧草を

翌朝、6 時過ぎひるぜんの大気に接していると牛乳の集乳缶を自転車でもたリヤカーで運んでいるのが眼に写る。近くの集乳所へ行って見ると、12.3 人の酪農家がそれぞれ集乳缶を持って集っており、交代制の管理者が、乳量を計り、アルコールの中に乳を入れて牛乳の質の検査をする等、忙しく立ち廻っていた。近くにいた人に、粗飼料の自給度について聞いて見ると「牧草を多くして濃厚飼料を少なくしてゆく経営にもって行きたいが、一般に牧草地が遠隔地にあたるため牧草の管理、採草運搬等に相当の労力が必要となり十分に牧草をやることができない」といっている。近くの原野等を利用しようとしてお権利関係で活用することができない状況が見受けられる。乳牛を飼養していない農家の水田の裏作、原野等の高度利用が望まれるわけである。

現状では、まだまだ改善策が残されているように思われるが、反面ひるぜんはジャージー牛で農家経営が向上したといつてよい。

ジャージー種が導入されるまでは、和牛を飼育していたのであるが、現在ではジャージー種の乳牛飼育が盛んになっている。

ホルスタイン種と比較してどのような経済性があるのか。

第 1 には、飼料中の栄養分をよく吸収して牛乳や

## 岡山畜産便り 1963.07

乳脂に変える率が高いということ、第2には養分吸収度が高いので飼料の量が少なくすむということ、第3には、体格が小さいということ、これは機動性に富むということで、30度前後の牧草地であっても何ら差支えなくかえって運動をさせることによって泌乳量が増加するといわれている。また体格が小さいため牛舎も小さくてすみ規模の小さい農家にも入りやすいという利点がある、第4には、寿命が長いということである。

## 準平原地に広がる牧草の波

ジャージー牛が導入され、牧草地も次第に改良されてはいるが、未だ利用されていない土地が川上村、八束村を含めたひるぜん山麓に相当あり、この土地を高度に利用し、将来生産性の高い酪農経営を行なう基盤育成のため昭和28年から集約牧野の造成改良をしてきたが、36年からは、朝鍋、蒜山上、高松、三木原、蒜山中の各地区に大規模草地改良事業を3ヵ年計画で実施している。

このうち、三木ヶ原は県営事業として実施しており、事業計画面積100ヘクタール。草地改良77ヘクタールで、このうち22ヘクタールは酪農大学の試験放牧地として利用することになっている。

また、三木ヶ原団地は大規模草地改良事業と併せて乳牛育成場を設置した。

これは地元のジャージー牛で生後7ヵ月以上、24ヵ月未満の未經産牛および乾乳牛の委託を受けて育成するものである。

本年は、特に生後10ヵ月以上15ヵ月未満の育成牛を5月27日に63頭入れており、同団地は採草地と放牧地にわけ、1頭当りの放牧面積は25アールを予定し、輪換放牧を行なうようにしている。

放牧地にはエッチワン、ペレニアル、オーチャード、メドフェクス等の禾本科牧草に加え、ラジノクローバー、レッドクローバー等のまめ科牧草がすくすくと伸びている。

今のところ、放牧地のスロープをゆるやかにおりた所にルーズバーン牛舎が2棟あるが、育成牛は、ほとんど放牧地で寝、また、強風のときは、谷あいの下りる程度で、気候のよい近ごろは、電気牧柵で囲われた大放牧地で十分に自然を楽しんでいるとい

った状況である。

飼料は生後10ヵ月頃までは濃厚飼料が必要であるが、現在委託を受けている牛は10ヵ月を過ぎたものばかりであるので濃厚飼料は給与してなく、しかもそれで十分成果が上るものと期待されている。

育成場での委託飼育は10月末で終り再び農家に帰されるが、農家へ帰ったときは冬期間に入るため、乾草、サイレージの準備が少なくフスマとワラによる飼育になりはせぬかという心配もあると場長は語っており、大規模草地で取れた牧草は乾草として乳牛の冬期飼料として供給するが、委託飼育した乳牛飼養農家には優先的に供給し、ジャージー牛を草で育てて経済性の高い乳牛にしたいという希望が伺われ、地域酪農振興の基盤となるべく鋭意努力がはらわれている。

(塩田記)

## 8月11~17日「草の週間」

スイスでは自分の所へでも、他人の所へでも良い草を移植し、良い草の種子をまいて行くという。皆が自分の国のスイスを愛するからである

日本もスイスになろうと思うのなら、皆で山へ、堤防へ、アゼへ良い草の種をまいて行けばどうだろう。

(川瀬勇)